

やすだ のぼる

安田 登

能楽師（下掛宝生流：ワキ方）

寺子屋 講師 （阿弥陀寺）

こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こまったときの 聖人の 親鸞鳥



イラスト 中川 学

幽霊が見えた母

「年を取ると、どうも夢と現実の境が薄くなつた」という人がいます。物忘れも多くなるし、毎日がまるで夢の中にいるように感じると。

「夢に生きる」

私事で恐縮ですが、母が亡くなる前の一年間ほど、「レビー小体型認知」にかかっていました。幽霊が見えるという認知症です。

母と同年配のお年寄りもいれば、若い女性もいます。ときには子どもの霊も遊びに来る。来れば、霊たちは母とおしゃべりをするそうなの

です。楽しかったことを話すこともあるし、生きていたときに感じていた不満や、この世に残した思い（残念）を話すこともある。

私が母の部屋で話をしているとき「ほら、そこに子どもの幽霊がいる」といわれたりしました。私が幽霊たちの定席、すなわち母の前に座るので、幽霊たちは仕方なしに私の横に座るようです。ところが、母に言われてそつちを見ると「あら、消えちゃった。恥ずかしがりやなのね」となる。そこで、合図を決めることになりました。人差し指を一本で机を叩くと若い女性の幽霊、小指だと子どもの幽霊という風に。その合図があると、私の横に幽霊が座っているということがわかる。そこから先の話は、幽霊にも聞かせるようなつもりで母と会話をします。話がひとしきり落ち着くと、母は幽霊に向かって「早くお墓に帰りなさい」と言つて墓に戻ります。

す。まるで能です。

幽霊が見えるなんていう人がいると、同居する家族は大変だ、と言いますが、母の場合はそれがいい方に働きました。

認知症の症状のひとつに「物盗られ妄想」というものがあります。「おさいふがなくなつた。あなたが盗つたんじゃないの」などと家人や介護の人を責めたりする症状です。

しかし、母はそれを幽霊のせいにしてました。

「また、あのおばさんが来て指輪を持つて行つちやつたのよ。それをね、玄関の靴箱のところに置いておくの」

そんな風に、すべて幽霊のせいにしてくるのです。このおかげで、二世帯住宅に住んでいた妹も、ときどき通つて来てくれていたヘルパーさんも、あらぬ嫌疑をかけられることがありませんでした。しかし、それでも幽霊が見えるという人と一緒に暮らすのは、理解できないし、大変です。幽霊

が見えるという母とうまく付き合うコツは、幽霊が見える母を変だと思わずに、幽霊を「見る」ことができる自分の方がいいです。

変なんじゃないかと思うことでした。そうすると母の認知症は、私たちに霊の世界の存在を教えてくれる、ありがたい病気になったのです。

日本人は

夢を大切にしたい

私たちは、ものを見るときに「目（眼球）」を使うと思つています。しかし、夢を見るとときに「目」を使う人はいません。そして、自分がその夢を見ていたということを誰かに証明することもできません。「目」を使わずに何かを見たり、人には説明できない何かを見たりすることは、レビー小体型認知症ではない私たちにも、ふつうにあることなのです。そして、そんな夢を日本人は大切にしています。

「宇治拾遺物語」には、夢占い師の家で、他人が話す吉夢の話を盗み聞きした男が、その夢を自分のものにして、出世する話が載っています。夢を見たのは地方長官の息子、いまだいえば県知事の息子。彼は大出世をする夢を見たのですが、夢を盗まれたがために官職もないうままに一生を終えました。盗んだ男は、その部下の子で、本来ならば鳴かず飛ばずのはずでしたが、唐に留学までして、後に大臣にまで出世した吉備真備です。

また、源頼朝の妻、北条政子にも「夢買い」の話が残っています。ある日、北条政子の妹が、日月を掌につかむ夢を見たという話を政子に話しました。政子は「それは禍いをもたらす夢なので、私に売った方がいい」と勧めたのです。そこで小袖（着物）を代金として、妹は政子に夢を売ったのですが、実はこれは吉夢であり、その夢の通りに彼女は頼朝と結婚をした

ということが『曾我物語』に書かれています。

そこまででなくても初夢を大事にしたり、朝の食卓で家族で夢の会話をすることというのはありました。

フロイトたちのおかげで無意識の産物という地位に落とされてしまった夢ですが、それまでの日本では、夢というものはとても大切なものでした。そして、我々が親鸞聖人も夢のお告げ、夢告をとっても大事にされました。

死を宣告された

親鸞聖人の夢告

最初の夢告は、親鸞聖人十九歳のときです。

まず法隆寺に参詣して修行・研究をされた聖人は、聖徳太子の御廟に参詣されました。ご自分の出生のことを夢にご覧になられたのですが、その祈りがあまりに激しかったからか、さらに三日間、祈っている間になんと失神してしまうのです。そ

して、第二夜の午前二時ごろ、夢告を得ました。

聖徳太子が、夢のように幻のように自ら石戸を開いて現れたのです。光明赫然として廟の中は明るく照り輝いていました。

聖徳太子は親鸞聖人にお言葉を述べられます。

「我が三尊は塵沙の界を化す、日域は大乗相應の地なり、諦に聴け諦に聴け、我が教令を。命終りて速やかに清浄土に入らん。善く信ぜよ、善く信ぜよ、真の菩薩を」。

阿弥陀仏、観世音菩薩、勢至菩薩の三尊は、汚れたこの世を救おうとされていると告げられたあと、ショックなことを親鸞聖人に告げます。

「汝が命根は応に十歳なるべし」、お前の命はあと十年だということです。そして、「命終りて速やかに清浄土に入らん」、命が終わるときに清らかな浄土に入るだろう。だから、「真の菩薩」を、善く信ぜよ、善く信ぜよということです。

よくわからないお告げですね。「真の菩薩」とは何なのか。命が終わって入る「清浄土」とは何か。それが何だかよくわからないままに、これから十年間、親鸞聖人は不安な日々をすごされることになるのです。

浄土真宗の 基を作った夢告

この夢告の九年後、親鸞聖人は自分の命もあと一年と比叡山にある大乗院に籠られました。その満願の日に、夢に如意輪観音が現れて「善いかな、善いかな。汝が願、まさに満足せんとす。善いかな、善いかな。我が願、満足す」というお告げをされました。「お前の願いも、そして私の願いもかなうだろう」と告げられたのです。

今回のお告げもよくわかりません。比叡山を下りた親鸞聖人は、今度は聖徳太子の建立された六角堂に籠ら

れます。自分の命はもうすぐ尽きる。救われる道はあるのかと百日の参籠をされたのです。その九十五日めの夜明け、救世観音がまっ白な袈裟を身に着け大白蓮華の台に座った僧の姿をして、親鸞聖人にとっても大切なことをお告げになられました。

それは「女性を抱きたいと思うならば、私が女の姿となつて交わろう。そしてそなたの一生を莊嚴にし、臨終のときには極楽に導こう」というものでした。

それまでの仏教では、僧侶は女性を近づけてはいけない、肉体の交わりなどもつてのほかといわれていました。しかし、観音様はそれをお許しになられました。それどころか私がその相手になろうとおっしゃったのです。

これは、それまでの「修行をした僧侶だけが救われる」仏教から、「人間そのままで極楽浄土に導いてくださる」仏教へ

の大転換になった夢でした。

親鸞聖人は、この夢のあと法然上人のもとに赴いて浄土への道を開かれるのですが、親鸞聖人は「本願を信受するは前念命終なり、即得往生は後念即生なり」、すなわち生きている間に信心を獲得した瞬間に往生ができる、と書かれました。聖徳太子の夢を見た十年後に、古い命が終わって、新しい命が生まれたのです。

夢のお告げは、親鸞聖人のご一生を支えました。それほど夢というものは力のあるものなのです。仏教では「この世は夢まぼろしだ」といいます。そう思うことによつて、この世の苦しみから逃れようと教えました。しかし、親鸞聖人は夢を大切に

にして、そのお告げを「どうせ夢だから」と捨て去ることなく、それに従って生きられました。夢を現実の一部だと考えれば、目が覚めている

ときと夢を見ているときと、人生は二倍になります。ちよつと得をした気持ちになります。現実の世界で空を飛べる人はいませんが、夢の中では空を飛ぶこともできます。まるでスーパーマン、超人になったようです。毎日、頭の中がすっきりせずに、まるで夢の中にいるとお悩みの方は、そういう意味で超人的な境地に近づいているのかも知れません。夢を大切にしましょう。



『役に立つ古典』

(NHK出版)

安田登著

日本人に影響を与えてきた四つの古典（古事記、論語、おくのほそ道、中庸）を読みながら、それをいまの生活に役に立てる方法を紹介します。薄い本なので読みやすいですよ。